秀賞

未来へつなぐ贈りもの

岩手県釜石市立大平中学校
３年　成田　彗七

僕の祖父は、優しくて面白くて、何より自分のことより、人のことを一番に考える大の働き者でした。そして、祖父の口からよく聞く言葉は「じいちゃんは、いいから」と言って祖父はいつも自分のことより、僕たちのことを優先して、いろいろやってくれたり、美味しい食べ物を持ってきて食べさせてくれたりしました。僕だったら、大好物の食べ物をもらっても、一人で食べたいと思って人に譲ろうとも思わないし､ただでさえ大人は仕事をして疲れているのに、それから一緒に釣りに行ったりすることは僕にはできないと思いました。

そして、祖父は、何でもできる人で、小屋が必要な時は手作りで、一人で物置き小屋を作ってくれるなど、まるで大工さんのようでした。

東日本大震災があった時、僕は自宅に、兄と母と３人でいた時に大地震がおきました。僕の家は高台で津波の心配がない場所なのに、祖父はすぐ僕たちの元へ心配でかけつけて、無事なことを確認して、すぐ自宅へ戻りました。僕の祖父の家は、海岸付近です。僕の家から祖父の家へ戻る時、車ごと津波にのまれ、建物の間に引っかかり運よく助かったそうです。その後、僕たちが食べ物がなくて困ってるだろうと自転車で、おにぎりや食べ物を何回も持ってきてくれました。実は、祖父が津波にのまれたというのは、それからだいぶたってから、伯母から聞きました。きっと祖父は、僕たちに心配かけたくないのと、罪悪感を持たせたくなくて、言わなかったのだろうと思います。本当にどこまで人思いの祖父なのだろうと思いました。

そんな祖父が、突然６年前に亡くなりました。祖父は最期まで祖父らしい亡くなり方でした。それは、前日の夜までは普通に会話していたのに、次の日の早朝には亡くなっていました。兄が「一人で寂しかっただろうな」と言ったら、看護師さんが「人はね、最期は自分の望み通りに亡くなるものなんだよ、おじいちゃんは、きっと誰にも迷惑かけないで一人で最期を迎えたいと望んでたから大丈夫だよ」とおっしゃいました。その言葉に救われたけれど、最期くらい、僕たちにわがままを言ってほしかったです。

祖父が亡くなり、だいぶ後に気づいたのですが、亡くなる直前、兄と僕の子ども携帯にメッセージを残してくれていたのです。祖父からの忘れられない贈り物だと思いました。本当にどこまでも優しい人思いの祖父でした。

亡くなった後に祖父の兄弟、町内会の人、友達などから「じいちゃんに本当

に助けられたよ」「いなくなって困ってるよ」と、たくさん言われました。

話を聞くと冬に大雪が降った時、除雪機で、通学路や町内を除雪してくれたり、町内会で使っている物が壊れたらすぐ直してくれたりと、頼まれたり困っている人がいると、手助けしていたようです。

中でも一番すごいと思ったのは、町内にある神社に、手すりを作り上げたことです。100 段くらい急な階段を登った所にある神社まで、祖父は、その階段に下から上までロープで、手すりを手作りしたそうです。その当時は、作るのを反対する人もいたそうですが、今では「町内会の人たちは年をとって、その手すりがあって本当に助かっている」と、たくさんの方から言われます。祖父はきっと町内にはお年寄りが多いので、絶対手すりが必要になると思い、作ったのだろうと思いました。僕たちだけにではなく、周りの人たちにも忘れられない贈り物を残してくれました。

祖父が自然に、人のためにやってきたことが、たくさんの人たちの役に立っているということは、全て祖父の優しさから来ていることで、他の人では、絶対真似できないと思います。改めて祖父の偉大さを知り、尊敬できる自慢の祖父だと思いました。僕はそんな祖父を見習って、自分だけのことを考えるのではなく周りの人のことも考えて、小さいことでも困っている人がいたら手助けしたいと考えています。また生活する上でも、自然と「ありがとう」と言われるような人間になり、社会に貢献していきたいと思います。

いつか、僕も祖父の作った思いやりのこもった手すりを使って、神社の上まで登る時が来ることでしょう。生きている間に、みんなからの感謝の声を聞かせてあげることができなかった分、神社の上からみんなからの感謝の気持ちを、祖父に伝えてあげたいと思います。